

第II部

両大戦間期の中央ヨーロッパ

旧東欧諸国はEUに加盟し、ヨーロッパへの「復帰」を実現したといわれる。だとすれば、ウクライナとの違いはどこから生じたのだろうか。ここでは、歴史的な視点からロシアとヨーロッパの間について考える。

〔第II部にあたって〕

「危機の時代」における東と西の狭間

福田 宏

I 東と西と中央

第II部では、歴史的な視点から中央ヨーロッパを捉えてみたい。とはいえ、ロシアとヨーロッパの狭間は太古の昔から不安定な地域と見られていたわけではない。ウルフは、西ヨーロッパと東ヨーロッパという区分が一八世紀末の啓蒙時代に誕生したと見ているが（Wolf 1994）、中央ヨーロッパという認識が東と西の存在を前提として成立した以上、この概

念そのものも啓蒙期以降に登場したと考えられる。それ以前についてはヨーロッパを南北に分ける考え方が支配的であり、単純化を恐れずにいえば、南のイタリア地域と北の「野蛮」という構図が存在していた。ところが、イギリスやフランスが文明の中心として捉えられるようになると、南と北ではなく東と西を区分する見方が主流となる。つまり、「進んだ」西と「遅れた」東という、サイードのオリエンタリズム論に通ずる認識枠組が、ヨーロッパの外部だけでなく内部においても設定されたのである。

東西を区分するこうした枠組は、対ナポレオン戦

争以降のドイツ地域に大きな課題を突きつける格好となった。フランスと一緒の西でもなく、「遅れた」東でもないというドイツ地域の自意識は、自らの居場所を確保するツールとして「中央」を創出する方向へと向かった（Buge 1999）。だが、この中央ヨーロッパが大きくクローズアップされるきっかけとなったのは、二〇世紀初頭の第一次世界大戦と、その結果として生じたハプスブルク君主国の崩壊である。第一次世界大戦中に広く使われるようになったドイツ語のミッテルオイローパ（中欧）という単語は、ドイツ主導による大規模な地域再編の可能性を予感させるものであった（板橋二〇一〇）。しかしながら、このミッテルオイローパは近隣諸民族の警戒心をも呼び起こした。民族自決原則に基づいて両大戦間期（戦間期）に誕生した国民国家群においては、このミッテルオイローパに對抗しつつ、それと同時に社会主義国ソ連にも対峙するという課題が認識されるようになった。このように考えると、中央ヨーロッパという問題の一つの原点がこの時期にあったといえる。

II 「危機の時代」における

国民国家と広域論

一九一八年九月から一月のごく短期間、すなわち第一次世界大戦の終了前後において、アメリカで民主的中部ヨーロッパ連合（Democratic Mid European Union）が提案されている。このとき、新生チエコスロヴァキアの初代大統領となるマサリクやポーランドの初代首相となるパデレフスキが中心となり、ドイツのミッテルオイローパに對抗すべく、ダンツイヒ（現ポーランドのグダニスク）からメール（現リトアニアのクライペダ）、コンスタンツァ（現ルーマニア）からフィウメ（現クロアチアのリエカ）を結ぶ領域を守らねばならない、という議論が提出された（Levy 2006: 185-189）。ウイロン米大統領は、この連合が古いハプスブルク君主国を民主的な体制に置き換える一助となり、新しい国家同士の国境問題を解決する上でも役立つと考え、賛意を表明している。だが、一〇の民族あるいは地域の代表が集まってフィラデルフィアで開催された

会議では、ユーゴスラヴィアの代表とイタリアの代表、そして、ポーランド人の代表とウクライナ人の代表が境界線をめぐって激しく対立するなど、議論はまったくまとまらなかった。結局、民主的中部ヨーロッパ連合の構想は幻のまま終わった。

このときの経験に懲りたこともあってか、チェコスロヴァキア大統領としてのマサリクは、中央ヨーロッパ諸国を一つの単位にしようとする動きには一貫して否定的であった。そもそも、この地域の新興諸国は、ハプスブルク君主国を否定し、民族自決原則を掲げることによって自国の正当性を確保していた。しかも、すべての国家が隣国と何らかの形で領土問題を抱えており、各国が協調して広域秩序を形成していくのは困難であった。だが、逆説的ではあるが、秩序が不安定化した「危機の時代」であったからこそ、国家を超える枠組が目玉され、もてはやされた。最も有名な例はクーデンホーフのパン・ヨーロッパであろう（福田論文）。ハプスブルク君主国の元貴族であった彼の運動は、政治指導者にも影響を与え、ブリアン仏首相のいわゆる「ヨーロッパ連邦」の提案にもつながっている。また、経

スに合流した者もいるが、反ナチスを貫き、第二次世界大戦後に西ドイツの首相を務めたアデナウアーのような政治家もいた。彼は、EUの基礎を築いた人物でもある（板橋二〇一四）。

こうしたナシヨナリズムとヨーロッパの結合は他の国でも見られた。例えば、第一次世界大戦で敗戦国となった結果、ハンガリーはハプスブルク君主国時代の領土の約三分の二を失ったことから、その失われた領土を回復することが最大の課題と位置づけられるようになった（辻河論文）。だが、それはハンガリーのためだけの「大ハンガリー」ではなかった。それは、場合によってはソ連に対するヨーロッパの「砦」とも位置づけられた。これに対し、第一次世界大戦後に独立したフィンランドでは、「近親民族」たるカレリア民族との連帯を標榜し、同民族が居住するソ連のカレリア地域を自国に含めようとする膨張思想が発展した（石野二〇一二）。ここにおいても、フィンランドのための「大フィンランド」ではなく、西洋やヨーロッパ全体を東から守るための「大フィンランド」といった主張が見られた（石野論文）。

済界においては、国民国家ごとに市場が分断されたことを批判し、旧ハプスブルク君主国の広大な経済圏を復活させようという動きもあった（福田二〇一四…一一四―一一七）。

だが、中央ヨーロッパ、あるいはヨーロッパを志向する動きは、常にナシヨナリズムの対極にあるとは限らない。それどころか、ナシヨナリズムとヨーロッパが結びつく事例が少なからず見られたことにも注意を払うべきだろう。その極限的な例がナチスである。ナチスによるヨーロッパとは、あくまで「ゲルマン民族」のためのヨーロッパに過ぎなかったが、「ヨーロッパ国家連合」や「ヨーロッパ経済共同体」といったプランが提出され、プロパガンダとして活用されている（遠藤二〇一四b…七〇―七二）。また、両大戦間期のドイツでは「アーベントラント（西洋）」と呼ばれるカトリック保守の運動が力を持った点も興味深い（板橋論文）。アーベントラントにおいては、ヨーロッパ的価値の復活とともに反近代や反自由民主主義といったスローガンが併せて掲げられていたが、その中心的担い手はあくまでドイツ人とされた。この運動のなかには、ナチ

両大戦間期の中央ヨーロッパにおいては、広域的な枠組の必要性が自覚されながらも、ナシヨナリズムが高まるなかで国家同士の利益を調整することは容易ではなかった。こうしたなか、ユダヤ人はどう位置づけられていたのだろうか。現在の中央ヨーロッパ論においては、ユダヤ人はコスモポリタンな存在であり、民族の壁を乗り越える存在であったと位置づけられることが多い。だが、まさにこの中央ヨーロッパにおいて反ユダヤ主義が高まり、ホロコーストが行われたことも事実である。当事者のユダヤ人にとって、中央ヨーロッパに生きるとは果たしてどういうことだったのか。宮崎論文においては、シオニストでありながらポーランドにとどまり、ユダヤ人とポーランド人という二つのアイデンティティを維持した人物に焦点を当てる。

III 中央ヨーロッパの群像

本特集第II部では、両大戦間期の中央ヨーロッパにおいて活躍した五名の人物に焦点を当てる（表1

表1 第II部の各論文で取り上げる人物

名前・生没年	活動拠点	主張
リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー (1894～1972)	オーストリアなど	パン・ヨーロッパ
ヘルマン・ブラッツ (1880～1945)	ドイツ	アーベントラント(西洋)
テレキ・パール (1879～1941)	ハンガリー	大ハンガリー
エルモ・カイラ (1888～1935)	フィンランド	大フィンランド
アポリナルィ・ハルトグラス (1883～1953)	ポーランド	残留型シオニズム

誌『アーベントラント』を軸に展開されたこの運動では、主としてヨーロッパの連帯が主張されたが、具体的な政治運動を伴うものではなかった。『アーベントラント』周辺の少なからぬ数がナチズムに流れたとはいえ、すべてがそうであったわけではない。また、この運動は第二次世界大戦後の西ドイツでも受け入れられ、一九六〇年代まで継続した。

ここで特に焦点を当てるのは、月刊誌『アーベントラント』において中心的な役割を果たしたヘルマン・ブラッツである。ブラッツは、ヨーロッパの本来的な結びつきが世俗的な権力国家と偏狭なナショナリズムによって破壊されたとし、それを救うことができるのはカトリシズムのみと主張した。板橋論文では、このブラッツを通してドイツの保守主義的ヨーロッパ理念を検討する。

辻河論文では、ハンガリーの「歴史的領土」の一団性を訴えたテレキ・パールに焦点を当てる。テレキは「大ハンガリー」の正当性を主張しつつ、ヴェルサイユ体制だけでなく国際連盟についても、戦勝国の利益を固定化させる役目を担っていると批判し、その修正を主張した。だが、ナチズムには一貫

参照)。

まずクーデンホーフに関してであるが、彼が知られるようになったきっかけは、第一次世界大戦直後の著書『パン・ヨーロッパ』である(福田論文)。

彼の運動は各国の指導的な政治家にも支持されるようになり、一九二九年には、ブリアン仏首相のイニシアティブにより「ヨーロッパ連邦」の提案がなされてもいる。だが、こうした試みが失敗した後、彼はオーストリアのファシズム体制と提携しつつ、ムツソリーニにもアプローチしようとした。

こうしたファシズムとの関係を見る限り、当時におけるクーデンホーフの行動は現在の「EU規準」からは逸脱しているように見える。だが、ここで重要なのは、ヨーロッパの危機を救う存在として、ファシズムあるいはナチズムに対しても一定の期待が寄せられていたことである。そうしたなかで、クーデンホーフがどのようなヨーロッパ観を持ち、ファシズムに何を期待したかについて問うことが必要であろう。

次の板橋論文では、ドイツのアーベントラント運動に着目する。カトリック知識人を中心とし、月刊

して批判的であった。彼は首相在職中の一九四一年に死去しているが、ナチス・ドイツへの加担を嫌っての自殺と見られている。

テレキは、現在においても位置づけの難しい人物である。政治と地理学研究の両面において目覚ましい活躍を見せた一方、反ユダヤ主義者であり、近隣諸国との関係改善に配慮できなかったという点にも注意が必要であろう。辻河論文では、テレキがいかなるヨーロッパを望み、いかなる論理で歴史的ハンガリーの「復活」を正当化しようとしたのかについて検討する。

石野論文では、「大フィンランド」構想の担い手であったエルモ・カイラに着目する。膨張思想の母体となった右翼団体のカレリア学徒会は、政界や官界などのエリート層に浸透し、最盛期には四千名もの会員を有したという。この学徒会は、一九四四年のモスクワ休戦協定後、連合国側から「ファシズム団体」と見なされ、解散させられるが、両大戦間期においては大フィンランド構想を牽引する存在であった。ここで取り上げるカイラは、一九二〇年代にカレリア学徒会の会長を務め、同会の基礎を固め

る役割を果たした人物である。
義勇軍としてロシア・カレリアに遠征した経験を
持つカイヤは、カレリア学徒会において「ロシア人
憎悪」のキャンペーンを張ったほか、国内からユダ
ヤ、ドイツ、スウェーデンといった「外的要素」を
排除する意思を有したとされている。彼が志向する
「純正なる」大フィンランドは、ヨーロッパ、ある
いは西洋の東方に対する砦として機能すべきもので
もあった。

宮崎論文では、ロシア領ポーランド出身のシオニ
ストであり、両大戦間に弁護士、ジャーナリスト
として活躍したハルトグラスを取り上げる。彼はユ
ダヤ人であると同時にポーランド人であることをア
イデンティティの拠り所とし、ユダヤ人が同権を保
障されるよう尽力した。彼はシオニストでありなが
らパレスチナへの移住を第一の課題とはせず、ポー
ランド社会においてマイノリティの地位を向上させ
ることを優先した。

一八世紀末以来、ロシア、プロイセン、ハプスブ
ルクの三カ国によって分割されていたポーランド
は、第一次世界大戦後に独立を「回復」することが

できた。だが、ポーランドの地理的範囲は必ずしも
自明ではなく、ウクライナ人やユダヤ人など、内部
にも多数のマイノリティを抱えていた。こうしたな
かで「残留型シオニスト」として活動したハルトグ
ラスは、両大戦間期ポーランドの多様性を象徴する
人物であった。

以上見てきたように、ここで取り上げる五名は、
必ずしも成功したとは言いがたい人物である。パン・
ヨーロッパ運動の祖であるクーデンホーフにして
も、ヨーロッパ統合の先駆者と評価されるものの、
基本的には周辺の位置づけにとどまっている。ハ
ンガリーの地理学者テレキ・パールは、両大戦間期
に首相を務めた人物であるが、反ユダヤ主義者であ
り、両大戦間期の権威主義体制を支えた政治家とし
て批判されている。フィンランドのエルモ・カイヤ
に至っては、社会の「ロシア人憎悪」を積極的に
煽ったことから、極端な場合、フィンランドのヒト
ラーとも見なされている。総特集第Ⅱ部において
は、こうした「癖のある」人間を敢えて取り上げる
ことにより、両大戦間期の実態に迫っていきたい。

●付記

本特集第Ⅱ部を企画するに当たっては、科学研究費補
助金・基盤研究（B）「東中欧・ロシアにおける歴史
と記憶の政治とその紛争」課題番号2528249（代表・
橋本伸也・関西学院大学）、同基盤研究（B）「社会主
義文化における戦争のメモリー・スケープ研究——旧
ソ連・中国・ベトナム」課題番号25283001（代表・越
野剛・北海道大学）、同基盤研究（C）「戦間期中欧論
の比較研究——民族自決原則と欧州統合の起点として
の地域再編論」課題番号15K03316（代表・福田宏・
愛知教育大学）、および、北海道大学スラブ・ユーラ
シア研究センター共同利用・共同研究「スラブ・ユー
ラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研
究」（二〇一四年度）の支援を得た。記して感謝申し
上げる。

●参考文献

石野裕子（二〇一二）『大フィンランド』思想の誕生と
変遷——叙事詩カレワラと知識人』岩波書店。
板橋拓己（二〇一〇）『中欧の模索——ドイツ・ナショ
ナリズムの一系譜』創文社。
板橋拓己（二〇一四）『アテナウアー——現代ドイツを
創った政治家』中公新書。
遠藤乾（二〇一四a）『ヨーロッパ統合にむけて——起
点としての第一次世界大戦』山室信一ほか編『遺産』

第一次世界大戦4、岩波書店、一七五—一九九頁。

遠藤乾編（二〇一四b）『ヨーロッパ統合史（増補版）』

名古屋大学出版会。

北村厚（二〇一四）『ヴァイマル共和国のヨーロッパ統
合構想——中欧から拡大する道』シネルヴァ書房。

福田宏（二〇一四）『ポスト・ハプスブルク期における
国民国家と広域論』池田嘉郎編『第一次世界大戦と帝
国の遺産』山川出版社、一〇六—一三四頁。

宮崎悠（二〇一〇）『ポーランド問題とドモフスキ——
国民的独立のバトスとロコス』北海道大学出版会。

ジャック・ル・リデー（二〇〇四）『中欧論——帝国から
EUへ』田口晃・板橋拓己訳、文庫クセジュ、白水社。
Bugge, Peter (1999) "The Use of the Middle:
Mitteleuropa vs. Strední Evropa." *European Review
of History* 6 (1) : 15-34.

Levy, Jonathan H. (2006) *The Internation: Wilson,
Madison, and East Central European Federalism*.
PhD thesis: University of Cincinnati.
Wolf, Larry (1994) *Inventing Eastern Europe: The Map
of Civilization on the Mind of the Enlightenment*.
Stanford: Stanford University Press.

●著者紹介

一五頁に掲載。